

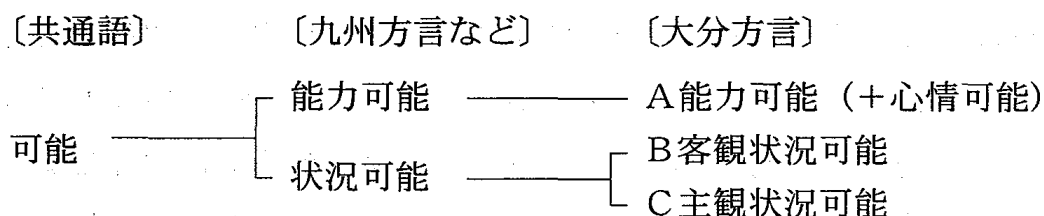
# 可能表現における世代差の追究

～大分県内6地点通信調査から～

松田 美香

## 1. 大分方言の可能表現について

筆者は2000年から本格的に大分方言の可能表現を調査してきた。拙稿(2001)<sup>1</sup>でも述べたように、大分方言の可能表現は、共通語や九州方言などに比べて意味の区別がより詳細にされている<sup>2</sup>。



可能の意味を担う形式数も多い。意味と形式の種類を以下にまとめた。

A 能力可能：～キル／キラン（以降はキルと呼ぶ）をおもに使う。

B 客観状況可能（外的条件可能とも言う）：

～（ラ）レル・ルル／（ラ）レン

（以降は（ラ）レル）をおもに使う。

C 主観状況可能（内的条件可能とも言う）：

可能動詞の語幹＋（レ）レル／（レ）レン

（以降は二重可能形<sup>3</sup>）をおもに使う。

これらの他に、可能動詞、～ダス／ダサン、～ウス／ウセン、～コナス／コナサン、～コトガデクル・デキル／コトガデキンも使用する<sup>4</sup>。

- 1 松田美香（2001年3月）「地域から発する可能表現の3区分化～大分県方言の可能表現についての一考察～」『地域社会研究』第4号学校法人別府大学地域社会研究センター
- 2 日高貢一郎（1991年）「可能表現」『大分県史 方言篇』（大分県）、渋谷勝己（1993年）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第1分冊（大阪大学）を基に作成した。
- 3 「レ足すことば」とも言われている。筆者は村上和也（2004年）「大分方言における可能表現についての一考察」（同志社大学文学部文化学科卒業論文）で「二重可能形」と呼ばれているのを見て、この名称を使うことにした。

上記の意味区分は明確・厳密にA、B、Cに区分されるものではなく、あくまでも段階的なものである。世代差や地域差もあり、可能表現調査は現在のところ分析が難しい状況にあるといえる。たとえば、個人によっては1つの形式でほぼ全ての意味を表せるとしているし、また各形式を使い分けるといふ話者であっても面接調査において答えに迷うことが多い。上記のA～Cにはおもに使われる形式を1つ選んだが、大分方言ではいわゆる可能動詞もよく使われるようである。さらに、「～出す」「～果せる（おおせる）」「～こなす」を可能の助動詞として使う場合もある。

九州方言研究会（2004）<sup>5</sup>では、西日本各地の言語研究者が被調査者（話者とも呼ぶ）を兼ねて、大量の質問文を母方言に翻訳するという可能表現調査を行った。この調査法は九州各地の可能表現体系の概要を知るのに大変役立った。しかしながら、地点と世代を揃えることができないという欠点もあった。そこで本稿は、大分県内各地・各世代の可能表現を通信調査によって調べた結果を、特に世代差から見てみようとするものである。地域差の分析については近く別稿で述べる予定である<sup>6</sup>。したがって、この原稿の調査方法等の記述や地図がそちらと一部重複していることをあらかじめ断っておく。

## 2. 方法の概略

調査票は、九州方言研究会（2004）に掲載されている「九州方言研究会可能表現調査第2版」、「可能追加調査」より25問を抜粋した。抜粋基準は、過去調査状況を見て多数の話者の解答が一致している（その傾向がある）もの。それぞれ、心情・能力・内的条件・外的条件<sup>7</sup>、肯定・否定、現在・過去を網羅するように質問を作成した。「能力可能」とは動作主体の能力（生得・後天的どちらも）による可能／不可能のことであり、「心情可能」とは

4 ダス、ウス、コナスについては、地域差が大きく、すべての意味に使えられる地域から、状況可能の特別な場合のみに使える地域までである。いずれも若年代には使われない傾向にある。

5 『西日本方言の可能表現に関する調査報告書』九州方言研究会編（2004年）

6 松田美香（2007年）「大分方言における可能表現の地域差・世代差～通信調査の結果および考察～」『別府大学』紀要第47号別府大学文学部

7 渋谷（1993）他に従い、可能の根拠となるものを「心情」「能力」「内的条件」「外的条件」として質問が作成されている。

動作主体の心情的な条件（恐怖の有無や勇気の有無など）による可能／不可能のことである。なお、これらの可能の根拠にはある程度の恒常性が認められる。他方、「内的条件可能」とは動作主体体内の一時的な条件による可能／不可能（体調や気分など）、「外的条件可能」は動作主体体外の状況による可能／不可能のことである。また、一段活用および二段活用動詞については、いわゆるラ抜き可能形と二重可能形が同形になっている可能性があるため（例えば、食べ+レル）、今回の調査項目から除外した。

質問文01～06・・・外的条件による可能表現の文。（ラ）レルが予想される。

07～13,19,25・・・内的条件による可能表現の文。

二重可能形が予想される。

14～19・・・能力による可能表現の文。キルが予想される。

20～24・・・心情による可能表現の文。キルが予想される。

内的条件の07は体調、08は気分、09は足のケガであって、わりと大きなケガで足には包帯をしているという注記をした。13のみ未来のことで、三人称。

心情可能は関西方言（ヨー+動詞）の存在によって区分されているので、大分方言にも区分があるか否かの検証のために入れた。肯定・否定や時制についても配慮した。（表1）

表1 通信調査票の質問内容（2004.09）

可能の根拠 肯・否	外的条件		内的条件		能力		心情	
	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定
現在（13のみ未来）	01,02	03	07,08,09 19,13	10,11	14,15	16	20,24	21
過去	04,05	06	25	12	17	18	22	23

各枠内の質問数が不均等なのは、ひとつは可能表現の場合、否定形の方が使う頻度が高く、調査しやすいので否定形の数の方を多くしたためである。

もうひとつの理由は、内的条件についてのプロトタイプ（典型例）を明らかにするために条件を細かく設定する必要があった。なお、使用した動詞については、日常会話で自然に使うものを選んだ。活用形については、「来る」以外はすべていわゆる五段活用をするものにした。

なお、返信が届いてから 21 番の質問の回答例がすべて否定形になっていたことに気づいた（肯定形を尋ねた質問だった）。理解して自由解答欄などを使って答えてくれた方もいたが、N（無回答）となっているものもあった。無記名のため同一人物で再調査はできないので、今回はこのまま結果を出すことにした。

調査年月日	2004 年 9 月に発送し、10 月末までに回収。
被調査者	大分県内 6 地点。 (1) 豊後高田市、(2) 安心院町、(3) 挾間町、(4) 野津町、 (5) 弥生町、(6) 日田市 <sup>8</sup> 。
話者の条件	その土地に生まれ育った中学生・その親・その祖父母 (外住歴の無い方)
調査方法	話者が内省によって調査票に書き込む通信調査法。
有効回答者数	69 人。各世代 2～6 名（回収率は $77 / 105 = 73.3\%$ ） 若年代 23 人、 中年代 22 人、 高年代 24 人（男女の区別無し）

話者を県内各地の中学生とその親とその親の 3 世代、調査当時 13 歳前後（若年代）、40 歳前後（中年代）、60 歳前後（高年代）になるようにした。各個人用に切手を貼った返信用封筒を用意し、中学生 5 名分×世代別 3 人分の 15 通を一括して国語科の先生宛てに送付した。宛先の国語科の先生には前もって電話で連絡を取っておいた。返信は各人から、または先生が取りまとめて送ってくださったものもあった。以上の条件での話者の選定を、各地

---

8 市町村合併により、現在では各町が市の中に組み込まれている。安心院町→宇佐市、挾間町→由布市、野津町→臼杵市、弥生町→佐伯市（図 2 を参照。）

の中学校国語科の先生や地域の方をお願いした。

上記の要領で調査を行い、形式によってどのような意味領域を持つかを年代別にみるためのグラフを作成した。

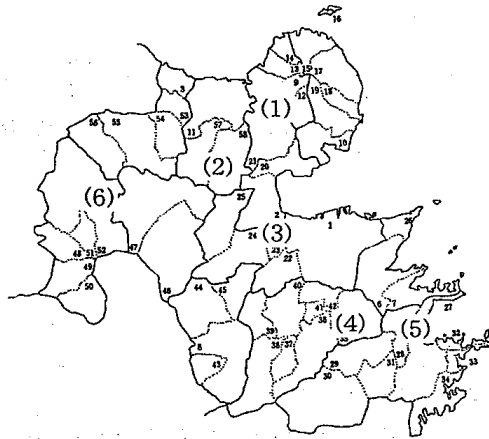


図1 大分県の地図と調査地点  
 (『大分県史 方言篇』の地図を利用)

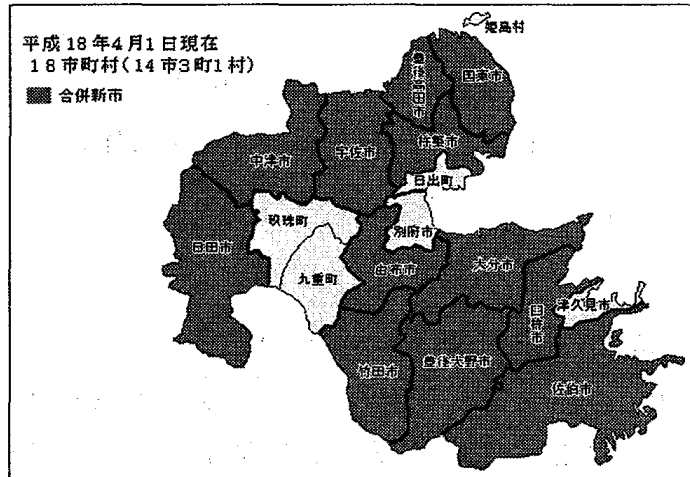


図2 平成19年現在のの大分県市町村図  
 (http://www.oita-gappei.jp/jyokyo/より)

ぶんごたかたし あじむまち はさまちょう のつまち やよいちょう ひたし  
 (1)豊後高田市、(2)安心院町、(3)挟間町、(4)野津町、(5)弥生町、(6)日田市  
 (調査当時の市町村名のまま)

### 3. 世代調査の結果および考察

#### 3-1. キルの世代差

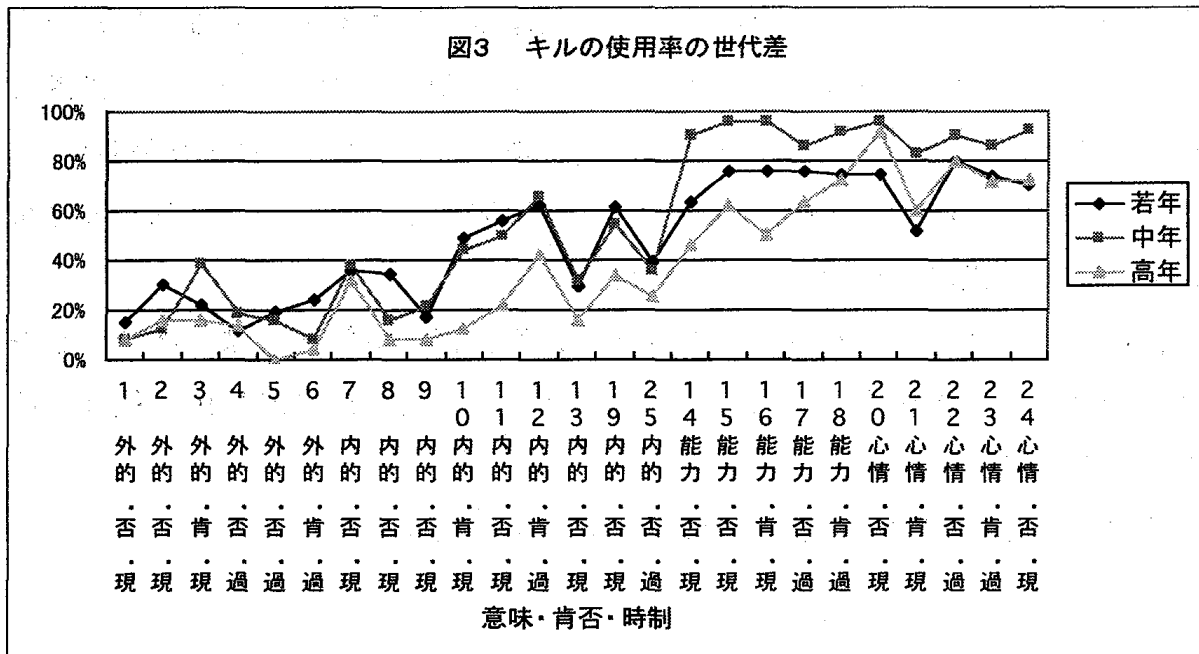


図3を見ると、外的条件可能の質問文（1～6）ではキルの使用率は低く、能力および心情可能の質問文（14～24）では使用率が高いことがわかる。また、内的条件の質問文（10～13, 19, 25）はちょうどその中間位の使用率で、その中でも質問文によって多少の数値の違いが見られることがわかる。

同図の世代差を見ると、中年代、若年代、高年代の順に高いが、心情については高年代は若年代より少し高い使用率である。キルの使用率が高い質問文を表2に示した。

表2 キルの使用率が高い質問文

20	夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができない
22	小さいころは夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができなかった
18	以前は海で10メートル以上もぐることができたのに
24	(流れの急な川を途中まで渡りながら) こわくて向こうまで渡ることができないよ
15	私は海で10メートル以上はもぐることができない

20、22番の動作の可能不可能の根拠は心情（性格的なものといってもよい）であり、15、18番の動作の可能不可能の根拠は能力である。心情可能、能力可能にキルが使われていることがわかる。これらに共通するのは、動作主体内に備わっているものであり、一時的な要素によるものではないという点である。なお、弥生町の高年代の24番に「ヨーワタランエー」、豊後高田市の中年代の20番に「ヨーイカン」、21番に「ヨーイク」の回答があった。これらはすべて心情可能の文である。大分県の南部に（ヨー+動詞）の分布はあるが、豊後高田市での回答は予想外であった。

内的条件の中で12番が高い使用率である。若・中年代では「体調」をキルが使える意味領域内にとらえている人が60%強、高年層は40%程度いることがわかる。

次に、キルの使用率が低い質問文を表3～5に示した。

表3 キルの使用率が低い質問文（高年代）

01	そのプールは工事中（改装中）で泳ぐことができない
05	きのうは用事があった郵便局に行くことができなかった
06	きのう時間ができてやっと郵便局に行くことができた
08	今日は気分が悪いから泳ぐことができない
09	私は足をケガして泳ぐことができない ※ わりと大きなケガで、 包帯を巻いている状況を考えてください

1、5、6番の動作の可能不可能の根拠は「改装中」「時間」「用事」であって、動作主体外の条件である。8番は「気分」であるから動作主体体内のことである。しかし、「気分」は一時的なものであって、時間とともに良くなったり悪くなったりするものである。9番も「ケガ」であるから、動作主体体外とは言えない。しかし、「包帯を巻いている」ことから、他者が確認することが可能であるという点においては共通している。以上、高年代でキルを使いにくい意味に共通するのは一時的な条件だということである。

表4 キルの使用率が低い質問文（中年代）

01	そのプールは工事中（改装中）で泳ぐことができない
06	きのう時間ができてやっと郵便局に行くことができた
02	時間がなくて行くことができない
05	きのうは用事があった郵便局に行くことができなかった
08	今日は気分が悪いから泳ぐことができない

1、5、6、8番は高年代と共通。2番は6番と同じ「時間」が根拠である。高中年代は2、6番とも使用率が低い。ここでもキルを使いにくい理由は、一時的な条件だということである。

表5 キルの使用率が低い質問文（若年代）

04	きのうは便せんがなくて手紙を書くことができなかった
01	そのプールは工事中（改装中）で泳ぐことができない
09	私は足をケガして泳ぐことができない ※ わりと大きなケガで、 包帯を巻いている状況を考えてください
05	きのうは用事があった郵便局に行くことができなかった
03	車があるので早く来ることができる

高・中年代が1、5、6、8番と共通しているのに対して、高・若年代は1と9番で、中・若年代は1、5番が共通している。しかし、グラフを見れば分かるように大きな食い違いはないと捉えるべきであろう。これらの表から言えることは、動作主体外の条件あるいは動作主体内の条件であっても一時的な場合は、キルを使いにくいということである。

なお、21番「勇気があるから(私は)夜のお墓でも一人で行くことができる」も前後の使用率からするとやや低い使用率だが、これは前述のとおり質問文に不備があったため、分析の対象から外すことにした(2. 方法の概略の質問文の項を参照)。

### 3-2. (ラ) レルの世代差

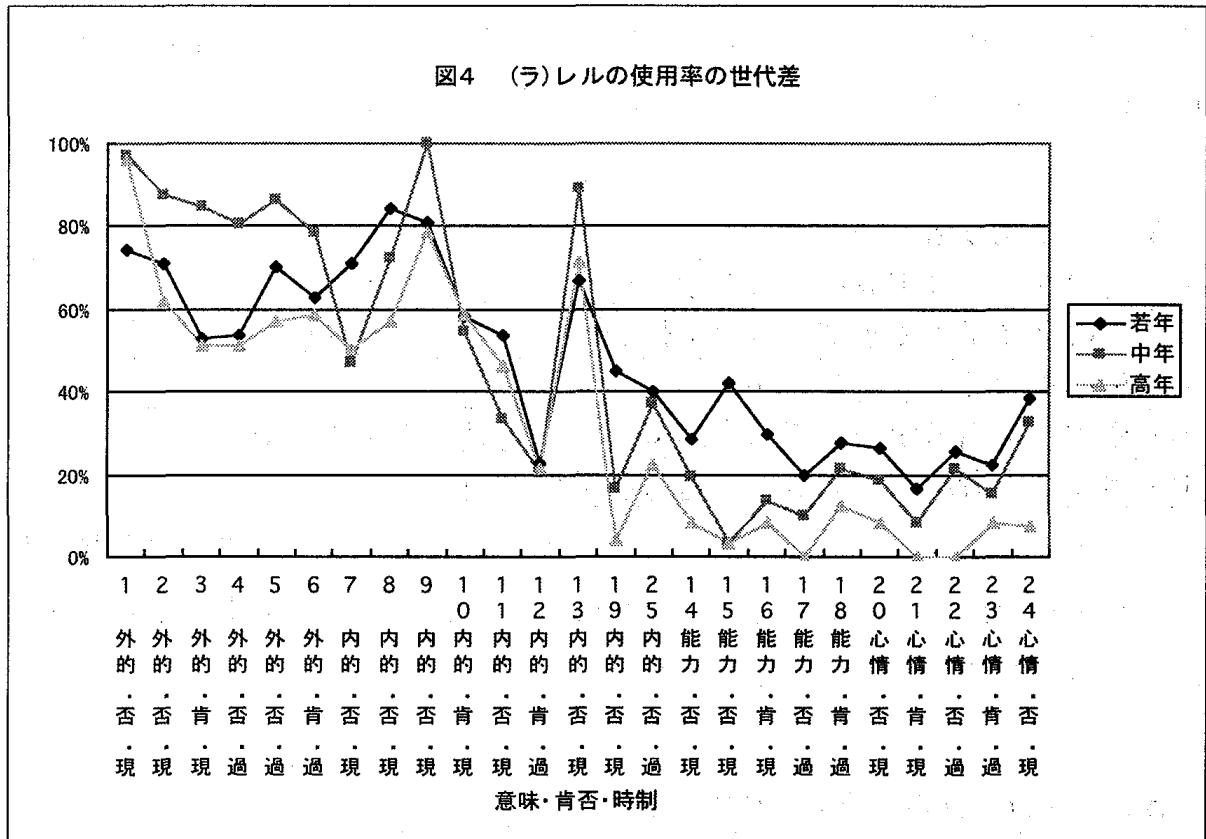


図4を見ると、全体的には左が高く右が低い。つまり外的条件の質問文(1～6)ではの使用率は高く、能力および心情の質問文(14～24)では使用率が低いことがわかる。

また、内的条件の質問文(10～13, 19, 25)はちょうどその中間位の



使用率で、その中でも質問文によって大きな数値の違いや年代差が見られることがわかる。

世代差を見ると、中年代と高年代に比べて若年代の数値幅が狭く、上の世代に比べて使い分けの基準が曖昧になっていると言える。また、中年代の9番と13番（どちらも内的条件可能）が突出して高く、反対に7番、12番、19番は低くなっていて、内的条件については使用率のタイプが分かれることがわかる。まず、(ラ) レルの使用率が高い質問文を表6に示した。

表6 (ラ) レルの使用率が高い質問文

01	そのプールは工事中（改装中）で泳ぐことができない
09	私は足をケガして泳ぐことができない ※ わりと大きなケガで、包帯を巻いている状況を考えてください
13	太郎は足をケガして泳ぐことができない ※ 大きなケガで包帯を巻いている状況で
02	時間がなくて行くことができない

1番「工事中」は外的条件としてはプロトタイプ（典型）的であると思われる。9番と13番には、「わりと大きなケガで、包帯を巻いている状況を考えてください」と注記をしてあったので、動作主体内の条件であっても、このような場合は(ラ) レルの使用率が高くなることがわかった。2番「時間」も外的条件である。9番と13番は特に中年代で高い使用率だった。

次にキルの使用率が低い質問文を表7に示した。

表7 (ラ) レルの使用率が低い質問文

17	私はむかしは100メートルも泳ぐことができなかった
23	きのう勇気を出してやってみたら夜のお墓でも行くことができた
22	小さいころは夜のお墓なんてこわくて一人で行くことができなかった
15	私は海で10メートル以上はもぐることができない
16	私は海で10メートル以上もぐることができる

3世代とも低いのは、すべて能力と心情の意味領域である。これらの意味領域は3世代ともおおむね40%以下であった。使用率の低さは高年代、中年代、若年代の順である。ちなみに21番は最低の数値であった。

表8 (ラ) レルの使用率が低い内的条件の質問文 (中年代)

12	きのうは体調がよくて1キロ泳ぐことができた	中 20.8%
07	今日は体調が悪いから仕事に行くことができない	中 46.9%

内的条件可能の意味領域では、中年代において各質問間に大きな差が出た。表8の7、12番は可能不可能の根拠が「体調」である。使用率としてはそれほど低いわけではないが、中年代の内的条件可能の中では極端に低かった。体調が原因の可能不可能の場合、(ラ) レルが使いにくい傾向にあることがわかる。

表9 若年代と高年代で大きな差が出た質問文

19	(すでにお酒をたくさん飲んでいて) もうこれ以上飲むことができない	若 45% 高 4.2%
15	私は海で10メートル以上はもぐることができない	若 42.2% 高 3.3%

若年代と高年代で大きな差が出たのは、19番と15番である(表9)。19番の若年代の使用率45%に対して、高年代は4.2%、15番は若年42.2%に対して高年3.3%だった。(ラ) レルの意味領域が若年代は曖昧になってきていると言える。

### 3-3. 二重可能形の世代差

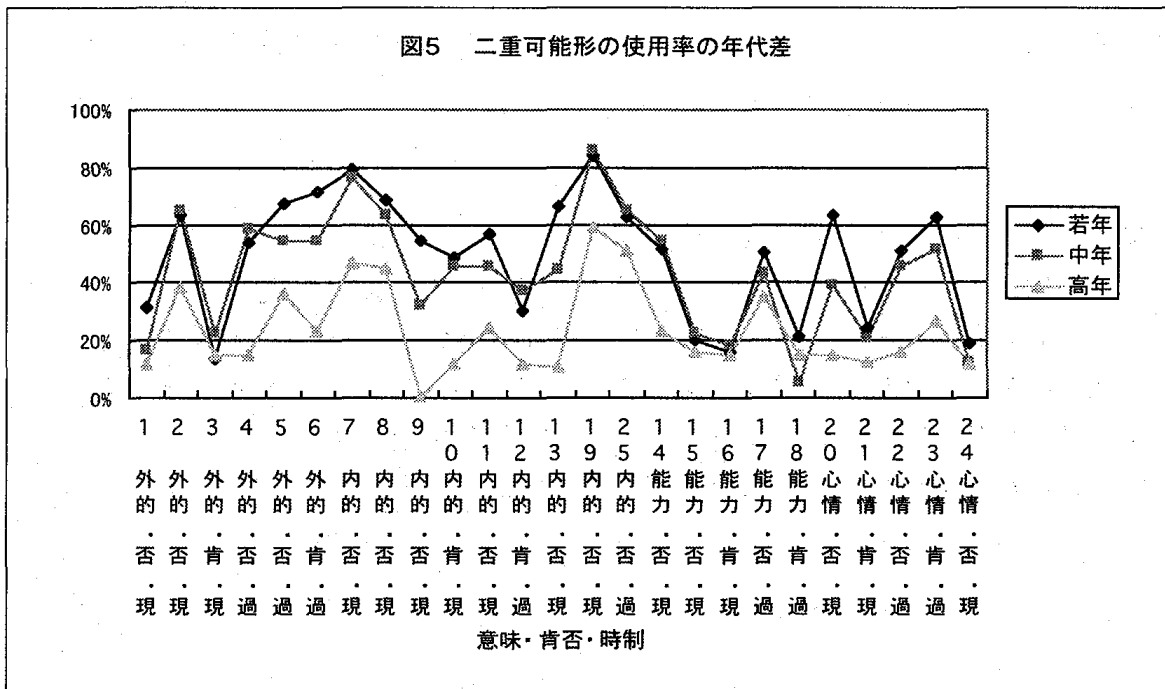


図5を見ると、中年、若年、高年とも大きく違う点はない。つまり全体的な使用率の微妙な違い以外には差が見られない。若中年代の7番と19番(どちらも内的)が高い数値を示していることと、左右のどちらかが高くなるというグラフではないことが指摘できる。二重可能形の使用率が高い質問文の上位を表10に、低い質問文の上位を世代別に表11～13に示す。

表10 二重可能形の使用率が高い質問文

19	(すでにお酒をたくさん飲んでいて) もうこれ以上飲むことができない
07	今日は体調が悪いから仕事に行くことができない
25	きのうは体調が悪くて仕事に行くことができなかった
02	時間がなくて行くことができない
08	今日は気分が悪いから泳ぐことができない

表10を見るとわかるように、「すでにお酒をたくさん飲んでいる」「体調」「気分」などの、動作主体内の一時的な条件が根拠になっているものが多い。しかし、2番の根拠「時間」は、一時的ではあるが動作主体内の条件ではない。

表11 二重可能形の使用率が低い質問文 (高年代)

09	私は足をケガして泳ぐことができない ※ わりと大きなケガで、包帯を巻いている状況を考えてください
01	そのプールは工事中(改装中)で泳ぐことができない
13	太郎は足をケガして泳ぐことができない ※ 大きなケガで包帯を巻いている状況で
10	今日は体調がいいから何時間でも泳ぐことができる
12	きのうは体調がよくて1キロ泳ぐことができた
24	(流れの急な川を途中まで渡りながら) こわくて向こうまで渡ることができないよ

9、13番は内的条件可能に入っているが、実際には(ラ)レルの使用率が高かった(図4の9、13番を参照)。筆者が「大きなケガで包帯を巻いている」という状況を書き加えたことにより、動作主体内の条件というよりも動作主体外の条件という捉え方をされたと解釈すべきであろう。1番は「工事中」で動作主体外の条件と捉えられるため、(ラ)レルのプロトタイプの意味と認識され(図4の1番を参照)、24番は「こわくて」だから動作主体

内の心情と捉えられるため、キルのプロトタイプの意味と認識されたため(図3の24番を参照)、二重可能形の使用は控えられたと考えられる。

10、12番は内的条件可能として設定したものであった。使用率が高い番号との違いは、肯否の違いである。全体的に肯定形の場合、二重可能形は使い難いようだ。これについては、後で詳細に考察する(4-3.)。

表 12 二重可能形の使用率が低い質問文 (中年代)

18	以前は海で10メートル以上もぐることができたのに
24	(流れの急な川を途中まで渡りながら) こわくて向こうまで渡ることができないよ
01	そのプールは工事中(改装中)で泳ぐことができない
16	私は海で10メートル以上もぐることができる
03	車があるので早く来ることができる
09	私は足をケガして泳ぐことができない ※ わりと大きなケガで、包帯を巻いている状況を考えてください

1、9、24番は高年代と同じ。1、3番は外的条件可能、9番もそれに準じるもの、16、18番は能力可能、24番は心情可能と捉えたためであろうが、1、9番以外は動詞がルで終わるという共通点もある。

表 13 二重可能形の使用率が低い質問文 (若年代)

03	車があるので早く来ることができる
16	私は海で10メートル以上もぐることができる
24	(流れの急な川を途中まで渡りながら) こわくて向こうまで渡ることができないよ
15	私は海で10メートル以上はもぐることができない
18	以前は海で10メートル以上もぐることができたのに

3、16、18、24番は中年代と同じ。3世代共通して低いのは24番。これらはすべて「来る」「潜る」「渡る」という動詞であり、この他にルで終わる動詞はないことから、「コレレル」「モグレレル」「モグレレン」「ワタレレン」という言い方が使用しにくくなっていると考えられるべきであろう。その理由にはレの連続を避けようとする意識が関与していると考えられる。今回調査した1~25番までのすべてのルで終わる、すなわち「レレ」となる動詞

が低くなっている。これは3世代共通の現象である。

以上のように、二重可能形の世代差は、意味上の区別や肯否の別に基づいて使用率が変動する高年代と、「レレ」音を避けるために使用を控える若年代との違いに見出すことができる。二重可能形については、さらに考察を進める必要があると思われるため、4-3. で詳述する。

### 3-4. 可能動詞の世代差

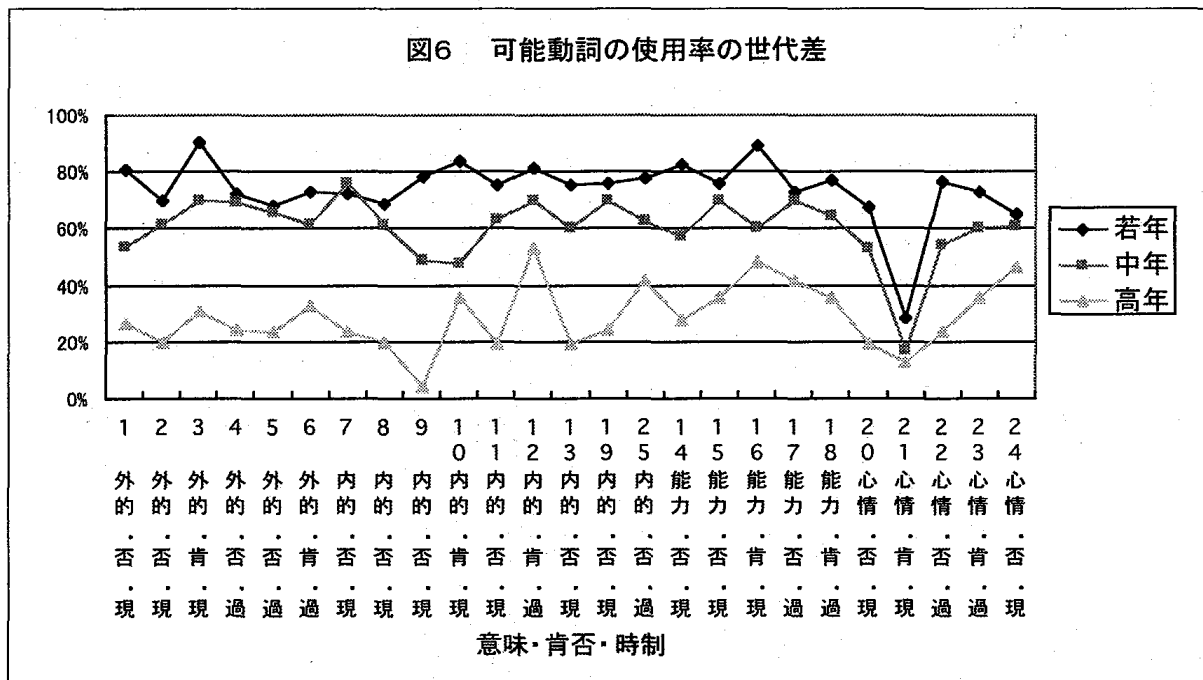


図6を見ると、若年代は21番を除いて80%前後の横ばいのグラフ、中年代も21番を除いては60%前後の横ばいと言ってよい。高年代は外的では20~30%前後の横ばいのグラフで、能力では30~50%、しかし心情可能の20~22番は20%前後と比較的上下差がある。21番については、前述(2. 方法の概略)の通り、調査票に不備があったためと思われるが、その前後の20, 22番も使用率が低い。

全体的に若年代では意味領域に関係なく盛んに使用され、中年代もそれに続いているが、高年代では何らかの使い分けがあるという結果となった。

表 14 可能動詞の使用率が高い質問文（高年代）

12	きのうは体調がよくて1キロ泳ぐことができた	内的・肯・過去
16	私は海で10メートル以上もぐることができる	能力・肯・現在
24	(流れの急な川を途中まで渡りながら) こわくて向こうまで渡ることができないよ	心情・否・現在
25	きのうは体調が悪くて仕事に行くことができなかった	内的・否・過去
17	私はむかしは100メートルも泳ぐことができなかった	能力・否・過去

高年代を見ると、表13のように内的、能力、心情が占める。中でも二重可能形では低い使用率であった12番や24番の使用率が高い。外的条件が全体的に低めであるのに対し、能力を中心として内的と心情の一部が高いという結果が出た。神部(1992)<sup>9</sup>では、大分県域には能力可能を表す可能動詞があり、それがキルに取って代わられたとしている。そう考えるならば、現在の若年代の可能動詞は新しいものであり、その前の古い可能動詞を使っているのが高年代ということになる。実際に高年代の多くは「読メル」を「ヨムル」などと二段活用動詞として回答している。また、高年代だけにはキルと似た意味領域が読み取れなくもない。しかし、決定的な証拠も得られていないので、これ以上の言及はできない。ただ、世代差がはっきりしていることを強調しておきたい。

最後に、21番「勇気があるから(私は)夜のお墓でも一人で行くことができる」の使用率が著しく低い。これも回答欄の不備のためかもしれないが、今回は分析できないため、結果だけを提示しておく。

#### 4. 大分方言可能表現における年代差の追究

##### 4-1. その他の形式の結果から

これまでの調査結果から年代差について指摘できることは、キルにおける心情可能や(ラ)レルにおける外的条件可能の一部以外(図3、4)は、おしなべて高年代の使用率が低いということである。特に、可能動詞については他の2世代からの隔たりが大きい(図6)。

9 神部宏泰(1992)「九州方言における可能表現法三形式の隆替と表現特性」『九州方言の表現論的研究』(和泉書店)所収

可能表現調査の回答欄には4種の形式の他に、1で述べたような、～ダス／ダサン、～ウス／ウセン、～コナス／コナサン、～コトガデクル・デキル／コトガデキンの選択肢も加えておいた。その結果、少数ながら回答があったので、それらを同様の年代差のグラフにした<sup>10</sup>（図7～10）。

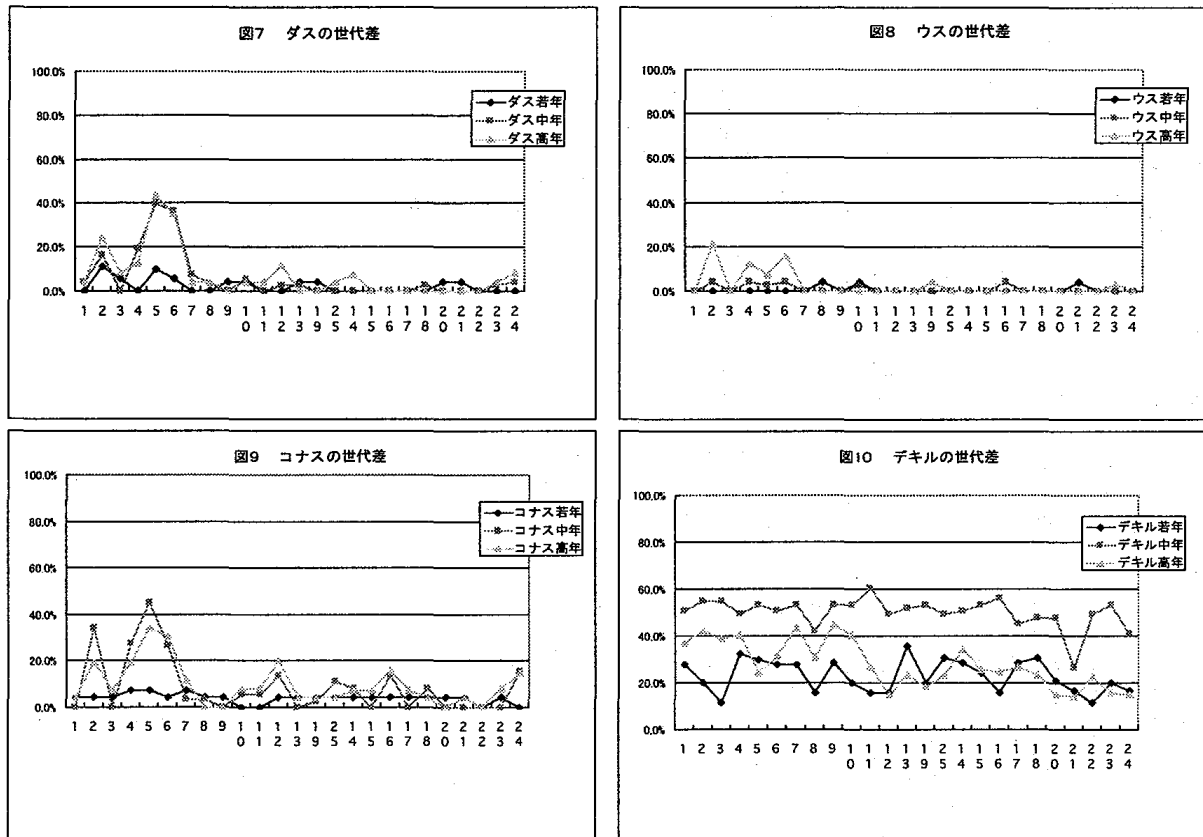


図7～10を見ると、ダス、ウス、コナスには世代差が見られる。ダス、コナスについては中・高年代において外的条件可能に使用率が最高40%強あるが、若年代にはダスが若干使われているものの、ほとんど使われなくなっていると言っていい程度の使用率である。ウスは高年代に最高でも20%強の使用率があるだけで、他の世代ではほとんど使われていない。

デキルについては、横ばいの点が可能動詞のグラフ（図6）と似ているが、若年代の使用率が低い点は大きく異なっている。もっともデキルの使用については、今後文体差などの影響も考慮に入れた調査が必要であると思われる。

10 1～25の内容は、図3～6と同じ。

このように、高年代の2、4～6番（いずれも外的条件可能）については、ダス、コナス、ウスなどの使用が他年代よりも高いことから、ダス、コナスは中年代まで、ウスはすでに高年代で衰退傾向にあることがわかる。また、これらは使用の地域差も大きい。

#### 4-1-1. ダスの地域差の概略

(4) 野津町と(6) 日田市では、外的条件可能の一部にまとまっているが、(1) 豊後高田市や(2) 安心院町ではそれ以外にも回答者によってはかなり広い意味領域にダスが使えらるとしている。(3) 挾間町は高年代に2人、(5) 弥生町では中年代に2人、高年代に1人で、意味領域にまとまりが見られない。

#### 4-1-2. コナスの地域差の概略

(1) 豊後高田市、(2) 安心院町、(3) 挾間町に多く、残りの3地域に少ない。その差ははっきりしている。(2) と(3) には若年層にも使用がある。意味領域はダスとほぼ同じ。

#### 4-1-3. ウスの地域差の概略

(4) 野津町で最も多い。意味領域も外的条件可能にまとまっている。(1) 豊後高田市、(2) 安心院町、(3) 挾間町、(6) 日田市はそれぞれ1人しか回答がなく、それぞれ1～4箇所回答があるものの、意味領域が特定できない。(5) 弥生町では4人が一箇所ずつ回答しているが、外的条件可能にまとまる傾向が見られるものの、2番に2人の他は重なっていない。

#### 4-2. その他の形式の年代差・地域差の結果からわかること

以上の結果から、県内に次のような分布が予想される。

県の西部（ダス中心）

県の北東部（コナス中心、ダスも多い）

県の中央部（コナス中心）

県の南部（ダス・ウス中心）

県の東南部（ウス中心）

これらの変遷を言語地理学的に考えると、ウス→ダス→コナスの順に古い



ことになる。これまでの年代差の結果からも、ウスが最も古くダス、コナスの順で矛盾無く説明できる。また、全体的には衰退傾向にあるこれらの形式の使用率を見ると、外的条件可能を中心にしつつも、他の意味領域へも侵入しているということがわかる。

高年代における可能表現は、より意味領域を細分化されたこれらの形式をもっぱら使っていた世代であり、そのために先に見た、若中年代を中心に使用されている形式の使用率は下がると考えられる。つまり、高年代は多くの可能表現形式の使い分け期、中年代はそれらと新しい形式の併用期、若年代はその他の形式はほとんど使わずに有力3形式と可能動詞との併用期ということになる。

#### 4-3. 二重可能形について

3-3. の「二重可能形の世代差」で述べたように、複雑な結果となった。まず、使用率については、中年代と若年代がほぼ同じ位である。しかし高年代は全体的に低めであった。この理由として、4-2. で有力形式の他にも可能表現に使われる複数の形式があること、高年代は他の年代に比べて併用が少ないことを挙げた。それでも、心情可能では高年代の使用率が最高でも23番の26.7%に対して、中年代で51.4%、若年代で62.8%など大幅に高いのである。このことからやはり、高年代にはあった意味領域の区別が次第に緩くなっていると考えられる。次項で意味領域について、考察を深めたい。

##### 4-3-1. 二重可能形の意味領域

先行研究では、内的条件は〈動作主体内の一時的な条件〉であった。しかし、今回の結果からは「時間がないから」という根拠でも二重可能形の使用が3世代平均55.6%と多かった。また、逆に「足をケガしていて」という動作主体体内の一時的な条件であっても「大きなケガで、包帯を巻いている状況」と書き添えることによって、二重可能形の使用率は9番28.8%、13番(3人称)40.5%と大きく落ち込んでいる。これらの事実を踏まえて二重可能形の意味領域を考えると、〈不可視的な一時的条件〉ということになる。

どうしてこのようなずれが生じるのかと言えば、時間の有る無しは一般的には「時間があれば～できる」すなわち動作主体内の能力以外の条件だと考えられるものの、時間そのものではなく時間を操る（やりくりする）のは動作主体だと言える。「最近の自分のスケジュールは過密だから」は一時的な要素であり、それは肉眼で確かめ得ないという要素から、二重可能形を使って表現する必要性を感じるのではないだろうか。

反対に「大きなケガで包帯を巻いているから」は、動作主体内の条件ではあるけれども一時的であり、さらに包帯を巻かれてしまった状態では誰からも当該動作をすることが不可能であることがわかるという、動作主体体外の一時的条件と同じだと捉えることもできなくはない。9番では高年代使用率0%、中年31.9%、若年54.4%であることから、若年代に向けて二重可能形の意味領域についての理解が薄くなっていることがわかる。

#### 4-3-2. 二重可能形の制約とその変遷

さらに、今回の調査で二重可能形には使用上の制約があることが示唆された。同じ内的条件でも10番、12番という肯定形では使用率が著しく低い。もっとも高年代で肯定形の使用率が低く、若年代にもややその傾向が見られるが中年代はそうでもないという世代差もあるが。高年代の肯定形の使用率が低いことから、二重可能形は否定形から始まったであろうと推察される。「行く」の可能動詞「イケル(イクル)」の否定形「イケン」では、「イキキラン」や「イカレン」に対して拍数が少なく、インパクトが足りない。それで可能の意味を強化するために「レ」を挿入するということから始まったと考えられる<sup>11</sup>。それは現在の大分方言で、「寝る」「見る」などの否定形を「ネラン」、「ミラン」と「ラ」を挿入して言うのと同じ原理である。この場合は五段活用に「～ラン」という否定形が多いことからの類推が働いているが、二重可能形では当時盛んに使われていたと思われる「～(ラ)レン」からの類推が働いたと考えられる。この変化のきっかけになったのは県北東部から「キル」が南下してきたことで、可能動詞は可能の意味強化の必要に迫られたことに

11 種友明・日高貢一郎(1981)「大分県津江地方の可能表現」『大分大学教育学部研究紀要』5-6所収を参照。

ある。その後、肯定形にも二重可能形を使うようになったが、日常生活においては<不可視的な一時的条件>による不可能つまり否定形を使用する場面が多いのに対して、可能つまり肯定形を使用する場面は少ない。それで、回答するときには違和感が伴うのだと考えられる。

若年代に特徴的なのは、「モグレレル」、「ワタレレル」などの「レ」の連続を避けようとする傾向が強く見られることである。可能動詞の結果では「モグレレル」、「ワタレル」の使用率が高いこともこの見方を支える。若年代ではルで終わる動詞の二重可能形を避け、可能動詞へと移行するという現象が起きていると考えられる。これは可能表現の中で二重可能形に可能動詞と異なる意味を見出していないということであり、形式の近さと共通語の支えもあって可能動詞へと移行しているのだと考えられる。

松田・日高 (1991)<sup>12</sup> の昭和 30 年代の記録から用例を拾った結果では、二重可能形は当時の 20 歳代以下にしか観察されなかった<sup>13</sup>。他の先行研究の結果からも、今の高年代くらいから二重可能形を使い始めたと推定される。中年代にかけて、二重可能形は盛んに使われるようになったが、若年代においてはわずかながら使用率の減少傾向が見られる。二重可能形は可能動詞を経た(変形した)形であって、可能動詞が無ければ成立しないことから、可能動詞から変化した二重可能形が、3 世代の間に再び可能動詞へと形を戻す動きということになる。二重可能形は、可能動詞がキルにおびやかされて形式の強化を図ったものであり、そのような時期には可能表現形式の体系は不安定になっていたであろう。そのために、ウス、ダスなどのさまざまな可能表現候補の形式が次々に生み出され、各地で広まりかけた。しかし、それらの形式は中年代を最後に使われなくなっていることから、可能表現としては発展することができなかつたと捉えるべきであろう。

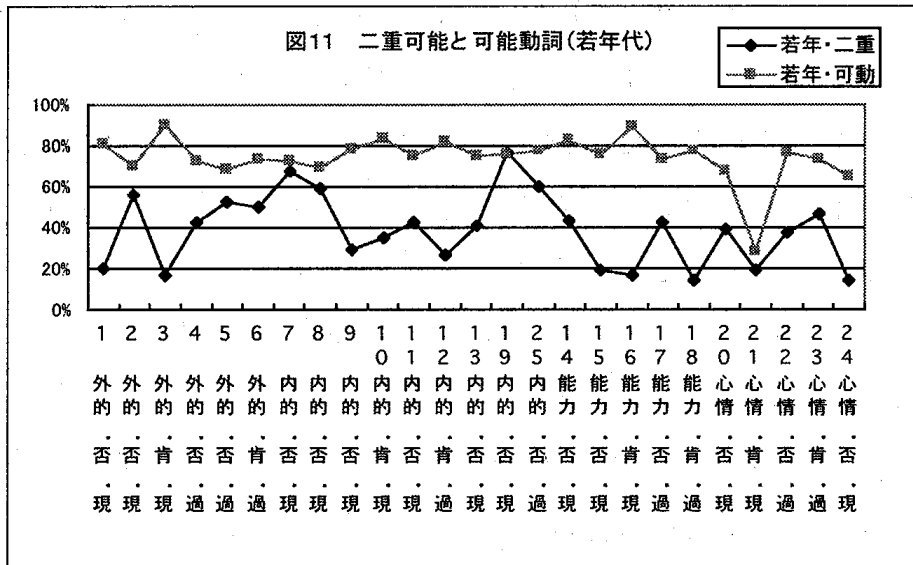
#### 4-3-3. 二重可能形と可能動詞

拙稿 (2007) でも述べる予定であるが、地域差からは二重可能形が内的

12 松田正義・日高貢一郎 (1991) 『方言生活三〇年の変容』(上下巻・カセット付き 桜楓社)

13 松田美香 (2005) 「日本語の中の [九州方言]・世界の言語の中の [九州方言] 8・表現が  
うまれるとき 可能表現」82～83p. 『日本語学』2005 年 12 月号 vol. 24 (明治書院)  
83p. を参照。

条件可能（動作主体内の一時的な条件による可能不可能）を表す使い方から、特定の意味領域を持たずに「できて嬉しい／できなくて残念」といういわゆる強調の用法へと変化している可能性を指摘した。それは、(6) 日田市を除いては二重可能形は若年代で意味領域を越えて盛んになっており、先の「レレ」の連続を避ける傾向や、使用率の結果の図 11 を見ても、二重可能形と可能動詞が相補的な関係になってきていると言えるからである。



神部 (1992)<sup>14</sup>でも述べているように、可能表現、とりわけ能力（心情）可能には一種のニュアンスが伴う。たとえば、「失敗できた」「間違えた（間違えることができた）」という言い方に違和感があるのは、その動作に望ましいという前提が無いからである。望ましい動作が前提と成る可能表現には、肯定形では「～できて嬉しい」とか「～できるとは素晴らしい」というニュアンスが、否定形では「～できなくて残念だ」とか「～できないとは悔しい」というニュアンスが伴うことになる。そういう意味では話者の感情までもを含む動的な表現であり、その動的な要素を失うまいと、常に新しい形式を取り入れ、その新規さによる強調効果を狙うのである。副詞「とても」の強調効果と、その効果を保つためにさまざまな語彙が取り入れられていくのと同じ原理である。

14 注9を参照

一方の外的条件可能とは、話者や聞き手の望ましさは同じとしても、動作主体とは別次元にある外的条件による可能か不可能かを表現する。したがって比較的静的なものとなり、能力（心情）可能ほどの新しさを求める必要がないのである。（ラ）レルの古さと安定度はそういう理由による。

神部（1992）では、大分方言では能力（心情）可能の形式が可能動詞からキルへと移り、行き場の無い可能動詞は二重可能形となって主情性（ニュアンスと同義か）の強い「主観状況可能（内的条件可能）」を表すようになったとしている。しかし、この調査時点からすでに半世紀も過ぎようとしている現在はどうかであろうか。

可能動詞が共通語の影響を受け、ますます若年代の中に取り入れられている。しかも、その使用にはそれまでの世代にはあった可能の意味の下位区分が見出せない。その点から見ても、共通語の可能動詞をそのまま取り入れたことがわかる。したがって、高年代の可能動詞とは別のものと見ることもできるのではないだろうか。そのように共通語としての可能動詞とよく似た形の二重可能形がすでにあるとき、お互いを混同し、二重可能形も意味の下位区分無しに使い始めるのではないだろうか。今回の調査結果から、そのような傾向が見られる。若～中年代の話者の情報からも、二重可能形を「嬉しい／残念だ」という話者の感情を添える場合や「目上の人に言う場合」という待遇的な差異などを伴って使われていることがわかる。

## 5. まとめと今後の課題

大分方言の可能表現には多種の形式があり、可能の意味が下位区分されてそれぞれに割り当てられているという前提で調査票を作成し、県内各地の3世代に通信調査を行った。本稿では調査結果をおもに世代差から分析した。

その結果、キル、（ラ）レルには使用率の大きな世代差は見出せず、二重可能形と可能動詞形には高年代の低さという世代差を見い出せた。さらに、ウス、ダス、コナス、デキルなどには中高年代と若年代の間に大きな差があることがわかった。そして、二重可能形の意味領域については、＜動作主体内か外か＞と＜恒常的か一時的か＞の大きな指標があり、キルが＜動作主体

内で恒常的な条件〉を担当し、(ラ)レルが〈動作主体外で一時的な条件〉を担当していることは間違いないが、使い分けは段階的なものであることも再確認できた。二重可能形は〈動作主体内の一時的な条件〉というよりは、〈不可視的で一時的な条件〉を意味領域に持つとすべきである。また、高年代では肯定形には二重可能形を使いにくいこと、若年代では「モグレン」などのレの連続になる場合は使いにくいこと、中年代はそういう制約をあまり受けずに盛んにつかっていることもわかった。

可能動詞は分析に注意を要した。共通語と同形であり、若年代を見る限りは意味領域も可能全般であることから、共通語の伝播したものと考えられる(若年代では平均 74.1% の使用率)。若年代の二重可能形と可能動詞には相補的な関係が見られることから、今後の二重可能形は意味の下位区分とは関係なく、一種の強調表現としての役割を担っていきそうだ。一方、高年代の可能動詞は二段活用で回答されたものがあることや、外的条件可能の使用率が全体的に低いことなど、若中年代とは違う使い方をされているらしいことがわかるが、今回はそれ以上の追究はできなかった。

今後は、さらに地点を増やして大分方言における可能表現の実態を明らかにすること、全国の可能表現の変遷を見ながら大分方言の可能表現の歴史を遡り、その体系を明らかにすることを課題としたい。最後に、これまでにわかったことから想定される大分方言の可能表現の体系についてまとめる。

表 15 大分方言の世代差(可能表現体系)〔〕内は、主たる形式ではなく、使用が一部分に限られているなど。

可能の根拠/年代	高年代	中年代	若年代
動作主体内の恒常的な条件	キル 可能動詞	キル 〔二重可能形〕可能動詞	キル 〔二重可能形〕可能動詞
不可視的で一時的な条件	キル (ラ)レル 〔二重可能形〕〔可能動詞〕	キル (ラ)レル 二重可能形 可能動詞	キル (ラ)レル 二重可能形 可能動詞
動作主体外の一時的な条件	(ラ)レル 〔ウス、ダス、コナス〕	(ラ)レル 〔二重可能形〕可能動詞 〔ダス、コナス〕	(ラ)レル 〔二重可能形〕可能動詞

可能の根拠は結局のところ、話者がどの点を一番の根拠にしているかで決

定されるものである。たとえば、3番「車があるので早く来ることができる。」も、「車の有無」が根拠になるなら「コラレル」だが、「車を自分の都合に合わせてすることができる」とか「何を使おうと自分が来ることができるのは自分の力だ」と考えて「自分の能力」が根拠と考えれば「キキル」になる。なるべくなら質問文はそこに対立する根拠が入り込まないようなものでなければならぬ。しかし、実際にはそのような質問文を作ることは非常に難しいし、完璧な質問文を作ることはできないと思われる。

共通語や鹿児島方言などはほぼ1つの形式だけで可能の意味全体を表すこともできるのだから、このような相互乗り入れ状態は不安定な状態なのかもしれない。しかしながら、短い形式で可能の根拠まで表現できる今の体系は、日常会話においては非常に便利な、手放し難いものと推察される。

- 【付記】
1. 調査票の全部掲載はしませんでしたので、詳細が知りたい場合はお手数ですが注6の拙稿最終頁をご覧ください。
  2. 本調査につきましては、大分県内の高田中学校、安心院中学校、挾間中学校、野津中学校、弥生町の昭和中学校、日田市の東有田中学校の国語科をはじめとする諸先生方、また本学総務課の高司淑子氏にお世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。また、調査に協力してくださった中学生とそのご家族の皆様にも深く感謝致します。